支那最近大事年表

小島昌太郎著

昭和十七年五月二十八日　有斐閣發行
A5判九八〇頁　定價八圓

支那事變以來、支那の現狀調査といつたものが諸方面に於て進められてゐる。現狀の正確なる把握の爲には歷史的知識が不可缺なものである事は論を俟たぬ所。支那に於ける施政とか、經濟再編制といつたものの對象になる現代支那は、勿論四千年以來の歷史的傳統を引いてゐるものではあるが、實際的にはアヘン戰爭以來のヨーロッパ文化によつて再構成せられた所のものである。依つてかうした實用的な面に於ては最小限この最近百年の歷史的知識が必須なものとなつてくる。かうした要求を滿たさんが爲に出現したものが本書である事は、その序文に、「中國各般の問題に關する研究調査をなす場合に於て、その溯及的闡明の必要に對して、敏速正確なる解答を與へんとした」とあるによつて明らかであらう。

本書の構成は一八四〇年のアヘン戰爭より一九四一年にわたつて、約三千件を十二項目に各年毎に分類し、各件毎に簡單な說明を記してをり、しかもそれに關する參考書及びその頁數をも記すといふ注意の行屆いたものである。

上述の如き意圖と構成をもつた本書に對して問題となるべきは、第一に分類方法であり、第二に基いた資料、參考書の適否如何であらう。

第一の分類について見ると、本書の項目は、內政・外交・財政・借款・產業・商業・貿易・金融・交通・社會・文化・雜の十二項目に分たれてゐる。此の分類は經濟學の分科をそのまゝ應用したものであり、支那的特色をもつものは「借款」の一項目にすぎない。かゝる機械的な分類は一應便利な點は認めるにしても、眞にこの最近百年の歷史の特色を理解せんとする者にとつては慊らぬ點が多い。之を類書と比較してみれば、申報館の「五十年來中國大事表」(申報館五十周年記念出版所收のもので、一八七二年より一九二一年に至る迄の年表として、支那のものでは最良のもの)は、國權統一、外交變化・民治發展・財政沿革・社會經濟・文化運動・勞働潮流の七項目に分つてゐるが、この分類は近代國家に生長せんと欲する現代支那人の意欲を端的に表明してゐると共に、この期の歷史的把握としても本書の經濟本位の分類よりも、はるかに優れてゐる。又最近出た東亞研究所第三部編の「支那近代百年表草稿」(これは歷史の年表として編纂されたもので、甚だ出來のよいもの、公刊を望む事切なるものあり)は、政治・經濟・社會文化と三つに大きく分ち、政治を更に內政・外交・財政(借款を含む)に細分し、更に歐米・日本・支那一般の欄を設けて、世界史的な把握に便せんとしてゐるが、この分類の簡明さの方を本書の煩雜な分類よ

りも評者は高く評價する。更にこの經濟本位の分類の最大難點は、かゝる分類によつてはその年々の性格、延いては歴史のエポックが掴み得ぬことである。例せば一九一九年及び二〇年は第一次歐洲戰以後急速に日本が大陸發展をなしてゐたのが、米國勢力によつて一頓挫し、その後十年間、日本は潜伏狀態に入らねばならなかつた重大なエポックであるにも拘らず、本書に於ては五四運動の記述があるのみで、このエポックを把握することは一寸難かしい。

第二に本書の用ひた資料を問題にして見よう。この最近百年の中、清朝期の史料は、根本的なものとして「清實錄」・「東華錄」が擧げられ、特に外交史料としては、「籌辦夷務始末」・「清季外交史料」・「清光緒朝中法交涉史料」・「清光緒朝中日交涉史料」等が最近十年間のうちに相繼いで出版せられて學界を裨益したのであるが、本書は「清史稿」を除く外はかうした根本史料は全然用ひてゐない。支那の根本史料を用ひてゐない事は、本書の性質上止むを得ぬとしても、その爲に內政・外交・社會の三項目に於て重大項目が相當落ちてゐる。例せばきりがないが、二三あげて見れば、一八九五年の三國干涉の前提である支那が列國に干涉を要求した事實（一八九四年の七月から十一月にかけて四回干涉を求めた）について何等記述なく、又義和團前史ともいふべき同治・光緒二朝にわたつて支那各地で數百回勃發した反キリスト敎暴動については、「天津虐殺事件」を除いて一言も觸れてゐない。それで何を基にしてゐるかといふに、邦・華・歐の參考書三百五十を用ひて出來たもので、本書の價値はこの尨大な書物を—その中は玉石混淆であるにしても—整理した點にかゝつてゐるのである。たゞ本書を手にした時に最も期待した歐文參考書の索引として役立つであらうといふ望みは、重要なるものの脫落によつて（一二あげて見れば、外交關係の Cordier—Histoire des Relations de la Chine avec les Puissances Occidentales 1860—1902. 3 Vols. とか、西太后治下の支那を描いた有名な Bland and Backhouse,—China under the Empress Dowager. 等。百瀨・沼田共著「近代支那と英吉利」の附錄の文獻解題と本書の書目表を比較すれば一目でわかる）裏切られたのは誠に殘念である。

以上不遜な言を弄したが、本書が從來の研究を一應整理したこと、及び各般の問題について要領のよい解說は、卷末の索引と相俟つて「溯及的闡明」を求める利用者に多大の便宜を與へるものである事は本書の大なる功績であり、その點著者に利用者の一人として感謝の辭ををしむものではない。〔長谷川一郎〕